

A
J
U

みずほ



NPO 法人

高次脳機能障害友の会みずほ発行

会報 第86号

〒460-0021

名古屋市中区平和 2-3-10 仙田ビル

電話/FAX 052-253-6422

メールアドレス npo-mizuho@miracle.ocn.ne.jp

ホームページ <http://www.npo-mizuho.com>



会員の大藪尚史さんの作品

目次

- 高次脳機能障害リハビリテーション WEB 講習会 P2~5
- 基幹相談支援センターしゃきょう研修会 P6~7
- 令和3年度高次脳機能障害東海ブロック連絡協議会 P7
- 特集【取材】なごや高次脳機能障害支援センターの運営評価・相談 P8~9
- 働くなかまの集い P10
- 企画グループ P11
- ミラクル(妻の会) & レディースの会 P12
- キッズプラス P12~13
- 若い失語症者のつどい P14
- 家族体験記 P15
- ワークハウスみかんやま P16~17
- 次号ご案内&募集 P18
- お知らせ P19~20

高次脳機能障害リハビリテーション Web 講習会

高次脳機能障害リハビリテーション講習会は、一般社団法人日本損害保険協会より助成いただき、昨年度に引き続き、WEB（Youtube）で開催されました（配信期間は2022年1月10日～22日）。今年度は「イラストでわかる！高次脳機能障害」と銘打って、柴本礼さんのイラストを交えながら「こういった障害なのか」「どう対応するのか」といった内容がわかりやすく語られた講義編と、当事者体験談の2部で構成されていました。

第1部の講義の講師はなごや高次脳機能障害支援センター長の稲垣亜紀医師です。「高次脳機能障害とは」と題して解説された中で、記憶障害、注意障害、遂行機能障害、社会的行動障害といわれるそれぞれの症状は、脳損傷の原因や主原因病巣（脳のどこを損傷しているか）によっても異なることを具体的に説明されました。後遺症があることが外からは見えない、あるいは見えづらいためにトラブルがあってもそれが症状の表れとして見えない、病院では守られた環境下なので症状が見えない、そして本人も見えていない（気づくことができない）、そういった「見えない障害」であるために社会との軋轢（あつれき）が生じていることも、様々な症例を示しながら説明されました。また、さらに、「50のシーンイラストでわかる高次脳機能障害『解体新書』（編著 名古屋市総合リハビリテーションセンター イラスト 柴本礼 2011年メディカ出版刊 現在廃版）」を引用して、それぞれの症状に合った対処法についても分かりやすく話されました。



稲垣亜紀 医師
なごや高次脳機能障害支援センター長

最後に、名古屋リハが平成13年から高次脳機能障害者支援に取り組んで20年経った今でも、未だ十分な支援が行き届かず、適切な時期に支援が受けられない人がいると思われることから、普及啓発や専門相談の拡充が必要だと述べられました。また、昨年7月に開設されたなごや高次脳機能障害支援センターでは、これまで着手できなかった「障害児童の就学支援」「高次脳機能障害者の自動車運転支援」「失語症者への支援」にも力を入れていくと今後の取り組みについても語られました。

第2部の体験談では、交通事故が原因で高次脳機能障害の後遺障害をもつ、HIROKIさんとKENJIさんのお二人の体験と周囲との関わりが紹介されました。HIROKIさんは会社での困りごとを、KENJIさんは生活の場面での困りごとを、それぞれ克服してきました。

HIROKI さんの体験談からいくつか・・・



職場で後輩に教える立場に、でも「何でできない!」「何で聞かない!？」といら立ちが！感情爆発するまでの導火線が短くなったみたい・・・;(〇´ ˘ 〇);:



主治医や支援コーディネーターに相談したうえで上司に協力してもらって手順を作成。何を優先して教えたらいかが判断しやすくなり、気持ちが楽になるとそれが顔にも(*^_^*) 相乗効果で周囲の雰囲気も良くなり仕事もしやすくなりました。



友人と BBQ、知らない人もいて顔や名前が覚えられず、情報量の多さにイライラも。でも気持ちを切り替えてこだわらないようにしました。

友人と週末の釣りが趣味。未だに仕事でのミスや人間関係で落ち込むこともあります、仲間とのたわいない会話でそんな気持ちが解消ができていると思います。「一つがだめでもこっちがあるや」ってなると、完全に落ち込まないと思うんです。趣味じゃなくても、何か一つでも好きなことを見つけることや自分の居場所ができること、誰かとつながれるものはおすすめです。それと、仕事で注意されてイライラしても、スマホに入れてある釣りの写真を見てリラックスできています。



(HIROKI さん) 私を支えてくれた人たちのおかげで今の自分がいると思っています。高次脳機能障害が残ったとしても、自分の好きなことが見つけられたり人とのつながりを見つかったりしたことで乗り越えてきました。私たちが社会参加できる場所が増えること、理解してくれる人が増えることを願っています。



ヘルパーと置き場所を決め、どこに片づけたかをわかりやすく掲示。そして一緒に確認！



忘れたりなくしたりすることは頻繁にありました。でも、周りは困りごとに気づけない KWNJIさんにそれを指摘せずに、原因やどうするのが良いかを一緒に考えました。また、環境を整えたり、声掛けの仕方を工夫したりしたことで、本人の混乱も減り、苦手なことを自覚するようになっていきました！



家族をはじめ、たくさんの人が
回復を願い、希望をもっている
いろとりとけの家族で、いろいろな
人と取り組んでくれました。

(お母さま)ここまで回復し、今があるのは、専門的な医療の継続とリハビリがあったからだと思います。そして一番は、家族を支えてくださった方々のおかげだと感謝しています。自分たちだけで何とかしようとせず、人を頼ることも大切です。ゆっくりだけど、高次脳機能障害は、社会とのかかわりの中で着実に良くなっていく気がします。みんなで一緒にがんばりましょう！

体験談の締めくくりとして、稲垣医師は、後遺症の主要症状によって日常生活や社会生活でいろいろな困りごとが現れたお二人に、次のような共通点があると話されました。

- ① 専門的な支援：うまくいかなかったり困ったりしたことの分析を、主治医や相談員等の支援員と一緒にいき、それに即したアプローチの助言を得て実践している。また、適切な支援がタイミングよく行われていることも重要。
- ② 人とのつながりで社会生活が充実している：ご本人を中心としたさまざまな人とのつながりを通して着実に社会生活が充実してきている。

そして最後に、「高次脳機能障害の影響が、個人の症状だけでなく、個人と社会環境との相互作用により問題が顕在化したり解決したりする構造をご理解いただけたと思う」と締めくくられました。



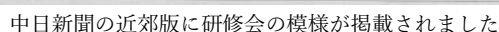
今回視聴された方のアンケートでは、「講義も体験談も、イラストを取り入れての話はとてもわかりやすかった」「家族目線でまとめられていて難しくなかった」「コロナ禍の中、疲れやすい当事者も外出しなくて済み、一緒に観られた」といったうれしい声をいただきました。その一方で、「講師に質問がしたかった」「資料がほしかった」という改善を望まれる声も寄せられました。（長谷川）

参加人数 513 名

(内訳)	当事者	:	22 名	当事者家族	:	86 名
	医療従事者	:	181 名	福祉関係者	:	142 名
	行政	:	21 名	学生	:	4 名
	一般	:	57 名			

～高次脳機能障害とは～

「交通事故や脳の病気などによる高次脳機能障害について、どのようなものであるかを知っていただき、現状と課題にふれながら、地域での支援の在り方を学んでいただく」ことを目的としたもので、当初は春日井市総合福祉センターでの開催を予定していました。しかし、新型コロナウイルスの急激な感染拡大を受け、急きょオンラインに切り替えての開催となりました。



当事者家族でみずほ理事の大澤奈保美さんは、息子さんが小児の時に受傷し、高次脳機能障害の診断に結び付くまでに時間を要したこと、親も気づけずにいたことや学齢期での困りごと、そして就労に至るまでのいろいろなエピソードを交えた体験談を語ってくださいました。（長谷川）

研修会に参加して

玉木　ひとみ

「この障害は様々な特性があり、特性の出方は複雑で人それぞれである。個人の症状を見極めていくことが大事。」と長野先生がおっしゃっていました。この点は私たち支援者

が利用者さんと向き合う姿勢で大事にすべき点と共通しています。

弊所利用者 A さんは注意障害から集中力が続きません。訓練で改善できるのか？それとも難しいのか？疲労がたまると頭痛が出てしまうため負荷をかける事に慎重になり悩んでいました。長野先生に質問したところ、「A さんが回復期なのか完了期なのかによる。」という回答と具体的な方法をご教授頂き、早速 “長距離走を目指さず、短距離走と短い休憩を組み合わせる方法” を試みました。少しずつですが、集中力や疲れをコントロールする力がついてきたと思います。

家族会大澤様のお話を拝聴し、息子さんが社会人として立派に活躍されている姿に心打たれました。A さんの支援者として希望を持つとともに気が引き締まる思いです。

長野先生の講義とご家族の体験談を通して、自分になかった視点や気づきを得、多くのことを学びました。この学びを事業所スタッフと共有し、利用者さんへのより良い支援に活かしていきたいと思います。ありがとうございました。



令和3年度高次脳機能障害東海ブロック連絡協議会

1月14日(金)令和3年度第2回高次脳機能障害支援普及事業東海ブロック(静岡・愛知・岐阜・三重)連絡協議会がウェブにて開催され、オブザーバー参加いたしました。各県からの取り組みの報告があり、各県拠点機関のパンフレット等の製作物については今後共有活用することと話されていました。

今回この会合の中で、Zoom 投票機能を使用し、「支援が難しい方の支援について」をテーマに委員、オブザーバーが幾つかの設問に回答するという新しい取り組みがありました。その設問の中の一つ「10年前と比べて、医療・福祉における高次脳機能障害のある方への支援についての理解・知識・技術等は向上したと感じますか？」に対して、

少し向上した(17) とても向上した(7) ほとんど変わっていない(2) という回答結果が出ていました。高次脳機能障害の支援に関して県が中心になり組織立って動いたり、高次脳機能障害という概念が当事者や専門職・支援者の間で定着してきたりしたことで、かなり向上してきたと感じる方もある一方、まだまだといった思いが大多数のようでした。私も関係機関の理解不足をいくつか感じることもあり、多数派の一人でした。

今後も家族会の活動を通じ、もっと関係機関に働きかけていかなければと考えます。

(河田)

特集

令和3年7月に開設されたなごや高次脳機能障害支援センターでは、支援のさらなる充実を図るといわれています。そこで、「運転評価・相談」についてはどのような取り組みがなされるのかをお聴きしてきました。対応してくださったのは、名古屋市リハビリテーションセンター附属病院第1リハビリテーション部 作業療法科となごや高次脳機能障害支援センターでの業務を兼任する作業療法士の吉原 理美(あやみ)さんです。

なごや高次脳機能障害支援センターの運転評価・相談

～ 取材からのまとめ ～

☆「運転再開に向けた支援」＝「検査に合格するための支援」とは考えていないこと

運転はその人にとって重要な作業ではあるけれど、責任や危険も伴います。様々な情報の提供などを行うことで、多くの方に納得して「運転をする」、「運転を控える」という判断をしていただくお手伝いができるとういと考えています。

「運転したい」という思いにこたえるだけが支援ではない
ということなんですね。



☆ 検査・評価のあり方は変わらないこと

これまで、運転再開を希望する高次脳機能障害がある方に対して、安全な運転に支障がないか作業療法士が評価をおこなって、検査の結果(評価結果)を主治医に報告してきました。

※評価は主に2つの検査をもとにおこなわれます。

- ・神経心理学的検査(ペーパーテストで、高次脳機能障害がどのような状況か測るもの)
- ・ドライビングシミュレーター検査(シミュレーターを使って反応検査・危険予測体験をするもの)

この運転評価のあり方については、今後も継続していく予定です。

また、評価の結果、基準を満たし運転再開の可能性が見込まれる方に対して、自動車学校と連携して実車教習をおこなっています。これは、「より安全に運転を継続していくために自身の運転を振り返る」、「教習指導員から自身の安全運転のために必要なことについて改めて指導を受ける」機会を提供するものです。運転に危険を伴う可能性のある方の実車での評価や練習を行うものではありません。

実車評価は実際の環境で評価ができるという点で望ましいのですが、運転に危険を伴う可能性のある方が実車で路上を運転することはリスクを伴います。また実際に運転した環境が統一できないため、たまたま道が空いていた、進路を譲ってもらえたなど危険場面に出合わなかった場合、高次脳機能障害の影響を見逃してしまう可能性があるという

デメリットもあります。一方、ドライビングシミュレーターは、事故が起こりそうな場면을再現することができます。そして、本当に危ない場面でそれに対処できるかどうかをきちんと評価し、数値で確認することができるという強みがあります。



実車評価の良さはもちろん認めているけれど、リスクの大きさも考えると、現時点ではドライビングシミュレーターの強みを生かして検査・評価を継続していくのがよいと考えているんですね。

☆ 新たに取り組んでいること

- ・ 普及啓発活動のためのガイドブックの制作・・・免許発行は、公安委員会(警察)が責任をもって交付する機関であり、医療機関のみで判断してはいけないのに、それ知らない医療専門職や支援者が少なくありません。また、当事者にしても、発症・受症後運転再開に向けて決められた手続きをとらないといけないのに、それを知らずに安易に運転をしてしまうといったケースもあります。運転再開のためにはどういう手順でしたらいいのかといったこと、高次脳機能障害があると運転にどのような影響があるのかといった問題点、法制度(道路交通法)など必要な情報をわかりやすく伝えていきたいと考えています。そのためのガイドブックを現在作っています。
- ・ 研修会を開催・・・医療機関だけでなく運転免許試験場の人とも連携し、一緒に支援者・医療機関の方に向けた研修会をおこないます。研修をおこなうことで、多くの医療機関で、同じような基準をもって同じ目線で同じ認識をもって運転再開に向けて取り組める施設が増えていくと良いと思います。
- ・ 支援センター内相談窓口の開設・・・まずは入院中の方を対象に運転に関する相談を受けます。そして、少しずつ相談窓口の対象を広げていく予定です。



支援のさらなる充実のために、1つの機関がすべてを担うのではなく、同じように支援に取り組む医療機関や他機関とも連携することで、高次脳機能障害者への支援の輪をさらに広げていこうと考えて、様々な活動をされているということも分かりました。



(都留)